資料１

千代田区
川沿いのまちづくりガイドライン案（たたき台）

令和４年　９月

千代田区

資料１

目次

第１章　はじめに……3

1.ガイドライン策定の目的……3
2.ガイドラインの位置づけ……4
3.千代田区内河川の歴史……5
4.ガイドラインの対象エリア……8
5.エリア別の概況……8

第２章　千代田区の川沿いの現状……9

1.対象エリアの人口推移……9
2.対象エリアの世帯数推移……9
3.区民の川に対する意識……10
4.土地利用……11
5.地域資源……15
6.各エリアの景観特性……19
7.眺望点とランドマーク……21
8.水辺に近づける場所……23
9.川沿いの現状を踏まえた課題……26
10.川沿いの空間が持つ機能・ポテンシャル……29

第３章　川沿いまちづくり実現のためのビジョン・方針……31

川沿いのまちづくりの方針……32

資料１

第１章　はじめに

１.ガイドライン策定の目的

千代田区の河川空間は、江戸時代より物資の輸送や川沿いの土地における河岸地としての利用など、人々の生活に欠かせないものでした。
その後、長い歴史の中で河川空間は、河川上に首都高速道路が走り、護岸にはカミソリ堤防と呼ばれる高い堤防が築かれ、建築物は背をむけた環境となってきました。

近年、河川空間については水辺の持つ自然環境や親水空間としての機能が見直され始め、まちづくりでは水辺を活用したいという機運が高まってきています。また、日本橋の首都高地下化など、千代田区内の河川を取り巻く状況は変革の時期にあります。

千代田区のまちづくりについても、令和３年に千代田区都市計画マスタープランを改訂し、つながる都心を将来像とし、都心生活の質「QOL：Quality Of Life」を豊かにしていく計画としました。「“人”が主役のまちづくり」、「豊かな都心生活の継承・創造」、「加速する社会の変革を支えるまちづくり」の視点を持ち、これからのまちづくりの展開、都心千代田ならではの魅力の進化のテーマの一つとして「緑と水辺がつなぐ良質な空間をつくり、活かすまちづくり」を掲げました。

さらに都市計画マスタープランで掲げた「つながる都心」の実現のため、千代田区ならではのウォーカブルなまちづくりを推進するため、令和４年に**「千代田区ウォーカブルまちづくりデザイン」**を策定し、河川空間はパブリック空間の要素として重要な位置づけがされています。

また、千代田区の古くから都市を形作る骨格である川をいかすために平成 27 年には人々が身近に感じられる空間として水辺の再生を目指し**「水辺を魅力ある都市空間に再生する条例」**が制定されました。

以上の取組から、都心の貴重な空間資源である千代田区内の河川空間を観光・文化・産業・歴史・防災など様々な視点から見つめなおし、水辺を心地よく過ごせる空間、人が歩く目線で楽しめる空間として質と機能向上を目指します。
住む人々、訪れる人々にとって新たな魅力ある都市空間として活用していくために本ガイドラインの策定を行います。

資料１

2.ガイドラインの位置づけ

当ガイドラインは、千代田区都市計画マスタープランの将来像実現のための魅力ある水辺空間形成を目指して、ウォーカブルまちづくりにおけるパブリック空間としての河川空間の有効活用の方策、千代田区の川沿いのまちが目指すべき姿を示すものです。

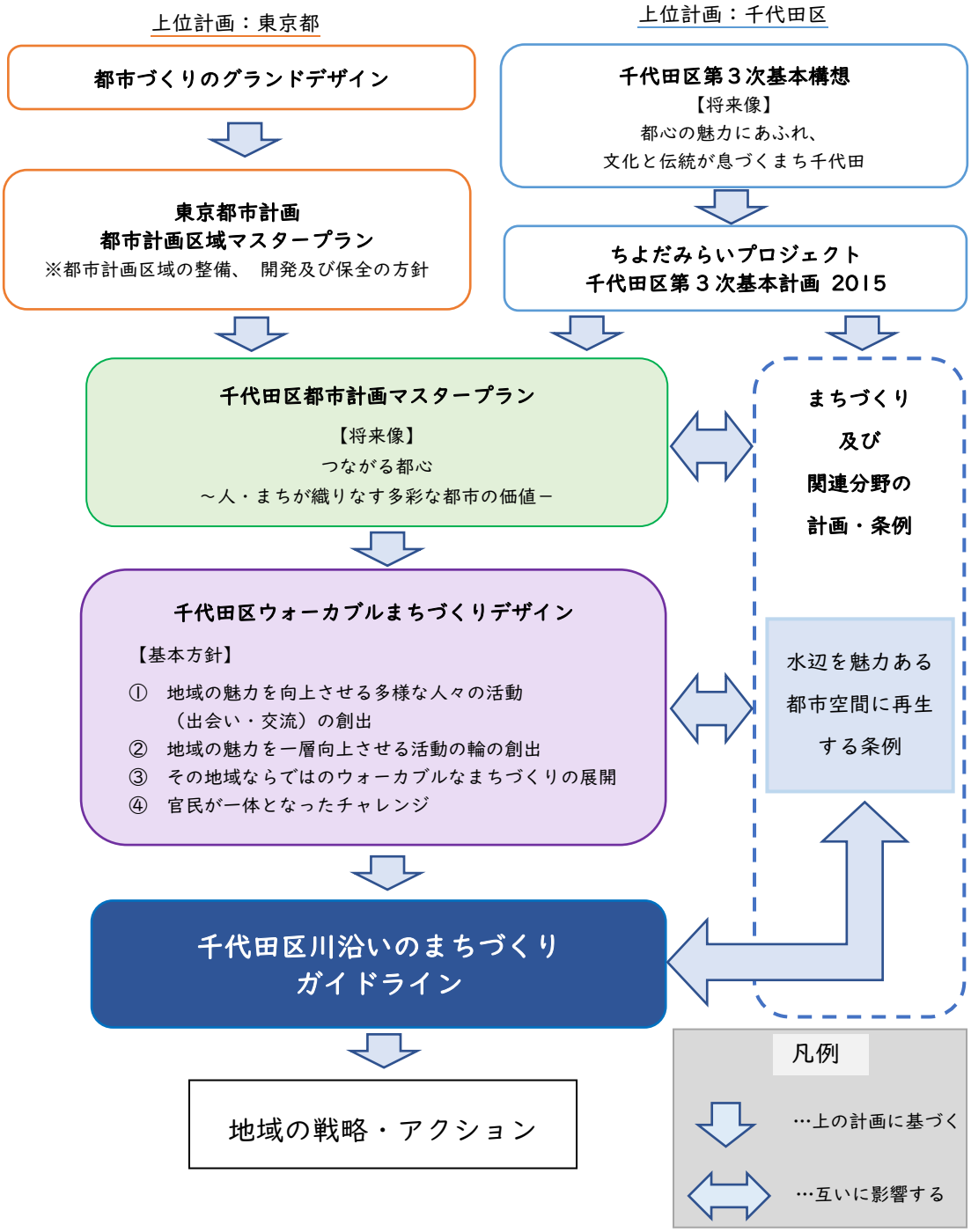


図　川沿いのまちづくりガイドラインの位置づけ

3.千代田区内河川の歴史

江戸時代まで-区内河川の形成-

千代田区内の河川は、江戸時代以前には総称して平川と呼ばれ現在と異なる流路で流れていました。

江戸時代に入り、天下普請と呼ばれる徳川幕府の江戸城各構築工事に伴い、城郭の整備とともに河川の整備がはじめられました。

その後江戸の都市の発展に伴い、平川の一部（現在の三崎橋～南堀留橋）が埋め立てられ、神田山（現在の駿河台）の大地を開削し流路を現在の隅田川の方向に変えるというものでした。そして、この工事により、現在の神田川と日本橋川の原型ができました。

図　江戸の原型

江戸城の外郭の完成に伴い、城郭の周りには川も含めた水路が張り巡らされ、多くの水路が水運に利用されました。水路の両岸には江戸の経済を支える様々な物資の河岸が立ち並びました。河岸地は明暦の大火以降、河岸地と道路の境目が明確化し、河岸地には土蔵が立ち並ぶようになりました。

河岸の裏には倉庫や問屋、市場等の流通機能が集積し、江戸のまちのにぎわいの一端を担っていました。

図　江戸城外郭の形成

神田川は、上流側では江戸に飲料水を提供する神田上水としての役割を持ち、また開削されたエリアは「茗渓（めいけい）」と呼ばれ江戸の人々に親しまれてきました。

明治時代-河川沿いの空間利用の変化-

その後時代は明治へと移り変わり、河岸地だったエリアについては、東京市へと払い下げられ、河岸地の間口一つだけではなく、企業や個人が複数所有しその中に水辺と一体となった近代建築が立ち並び、江戸以来の商業活動の重要な場所としての水辺を生かすように、銀行や生命保険会社など近代的な産業が生まれました。

図　外濠沿いに建設された鉄道

工業化・交通網の整備にも千代田区内の河川は利用されていきました。敷設された鉄道と運河を合わせて舟運を用いることで輸送機

能の強化が図られました。

この頃、日本橋川は再度三崎橋と堀留橋の間が開削され、現在の流路が出来上がり、神田三崎町のエリアは新たに敷設された甲武鉄道の貨物拠点である飯田町駅に水運の貨物発着場を設けるとともにレンガ造りの街並みが並び、新たなまちづくりの形が生まれました。

関東大震災-一度目の河川空間における転機-

千代田区内の河川には大きな転機となる出来事が三つあります。一つ目は、大正 12 年（1923 年）に発生した関東大震災です。震災で陸上の交通網が寸断される中で河川は復興のための輸送経路として活躍しました。復興事業により、現在も残る多くの橋りょうが震災復興橋りょうとして建設されました。

図　建設当初の聖橋

これらの橋のたもとには橋詰広場が取り入れられ、いくつかの橋には水上バスと市電などの陸上交通を乗り換えられるような環境が整備されました。

こういった取り組みにより水陸が多層的にネットワークで結ばれました。また、河川の改修も行われ、大型の船が通行できるようになるなど、利便性は向上しました。

その一方で、旧来の河岸機能とは別に広大な土地を求めて水上運輸の拠点は日本橋川の河岸地から下流方向に移動していき、物流の拠点は隅田川沿いの護岸もしくは埋立地に新設する港の整備へと変わっていきました。

第二次世界大戦-埋め立てられる外濠-

二つ目は、第二次世界大戦です。戦災により大量発生した瓦れきの処理のために広大な空間を持つ濠が利用され、外濠の一部や神田堀、浜町川といった小河川が埋め立てられ、道路として整備がなされました。

図　埋め立てられた外濠

こうして、江戸時代から連綿と受け継がれてきた水辺空間の一部が失われました。

首都高速の開通-川の上の空の喪失-

三つめは、高度経済成長期のモータリゼーション時代の到来です。

首都高速の建設は昭和 39 年（1964 年）の東京オリンピック開催に間に合わせるために濠や河川、道路などの公共用地を立体的に使う手法が用いられ、日本橋川の上空ほぼすべて、神田川の一部上空を高速道路が通過する風景が出来上がりました。

また、この頃伊勢湾台風での高潮被害が甚大だったことから、護岸堤防整備がなされ、コンクリートで覆われた現在の水辺風景が完成しました。

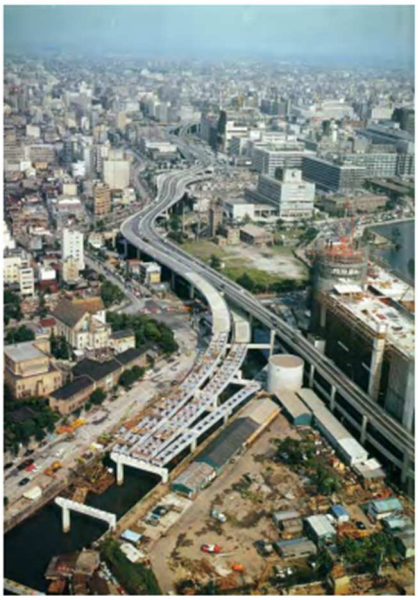


図　建設中の首都高速道路

4.ガイドラインの対象エリア

当ガイドラインでは、千代田区内の河川空間である日本橋川・神田川を中心に神田川と連続性のある水辺空間である外濠エリアを対象とし、現状・将来像の整理を行います。

対象エリア

日本橋川エリア…神田川との分流地点である三崎橋から中央区との区界である常盤橋までの区間

神田川エリア…神田川の区内の飯田橋から下流の中央区との区界になる左衛門橋までの区間

外濠エリア…飯田橋から弁慶堀までの区間

対象範囲

川・濠（護岸から）200m・30m の範囲

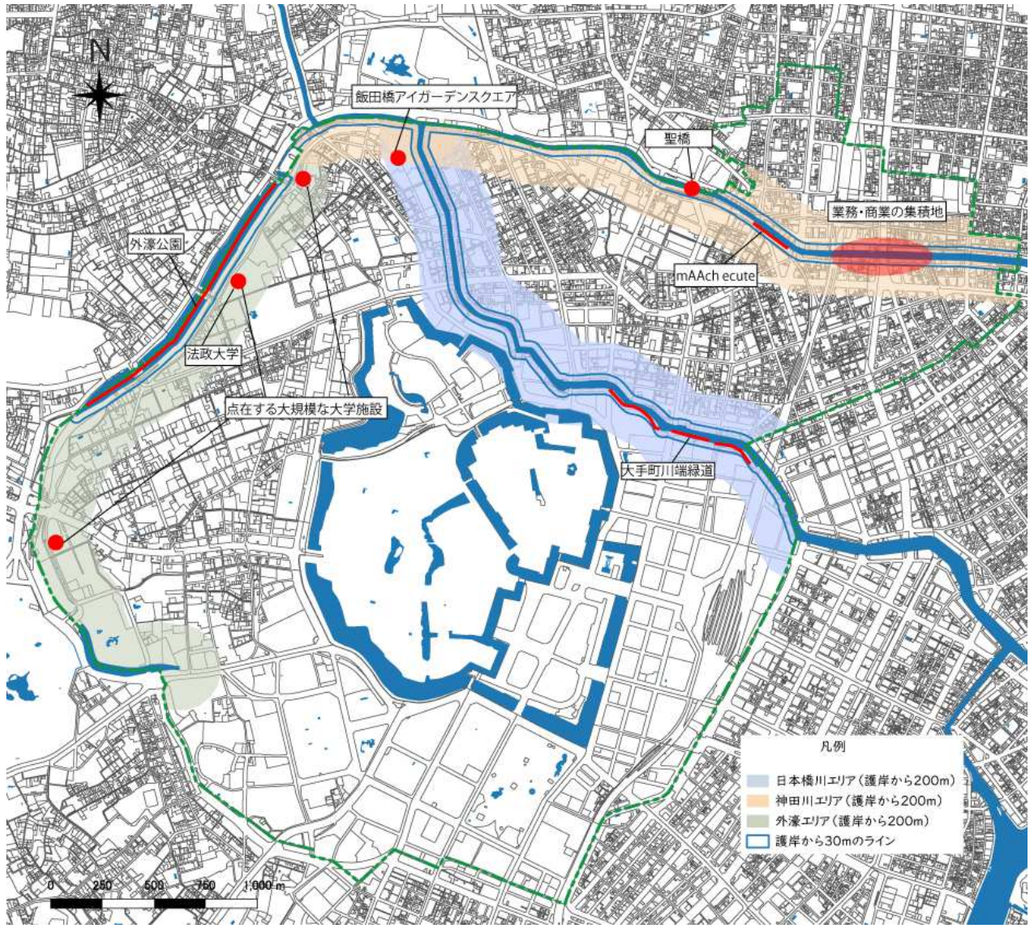


図　対象エリア位置図

5.エリア別の概況

日本橋川エリア

日本橋川エリアは、川の上空のほぼ全域を首都高が覆っています。エリアの大部分は大規模な公共施設・業務施設となっており、住宅地はごくわずかとなっています。川の上流側には飯田橋アイガーデンスクエア近くの整備された歩道、下流側には大手町川端緑道があり、一部区間ではあるが親水性の高い歩行者空間が整備されています。

飯田橋アイガーデンスクエア

大手町川端緑道

神田川エリア

神田川エリアは、エリア別に大きく様子が異なり神保町～万世橋地域では台地の底を流れる川を市街地から見下ろす自然豊かな地形となっており、万世橋～和泉橋地域では業務・商業の集積地の中心を流れる都市河川となっています。

また、万世橋～和泉橋地域では mAAch ecute をはじめとした水辺を眺めることのできる施設も点在しています。

御茶ノ水橋から見た聖橋と神田川

mAAch ecute

外濠エリア

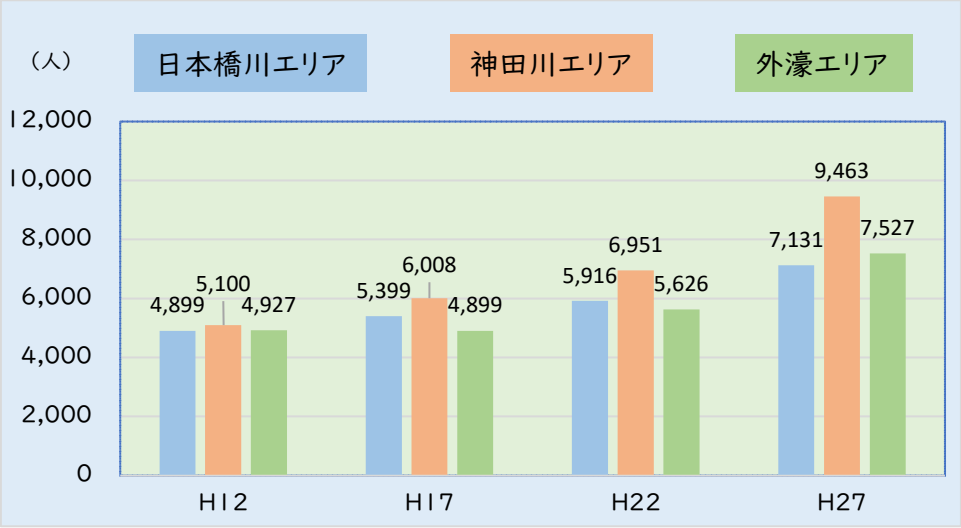
外濠エリアでは、市街地と水辺空間の間に鉄道が走っていて、水辺との距離はあるものの、川に沿って公園が広がっており、桜をはじめとした自然と外濠の歴史性を感じさせる空間となっています。また、付近には大規模な教育施設が点在し、落ち着きのある街並みとなっています。

対岸から見た法政大学

外濠公園の桜

第２章　千代田区の川沿いの現状

1.対象エリアの人口推移

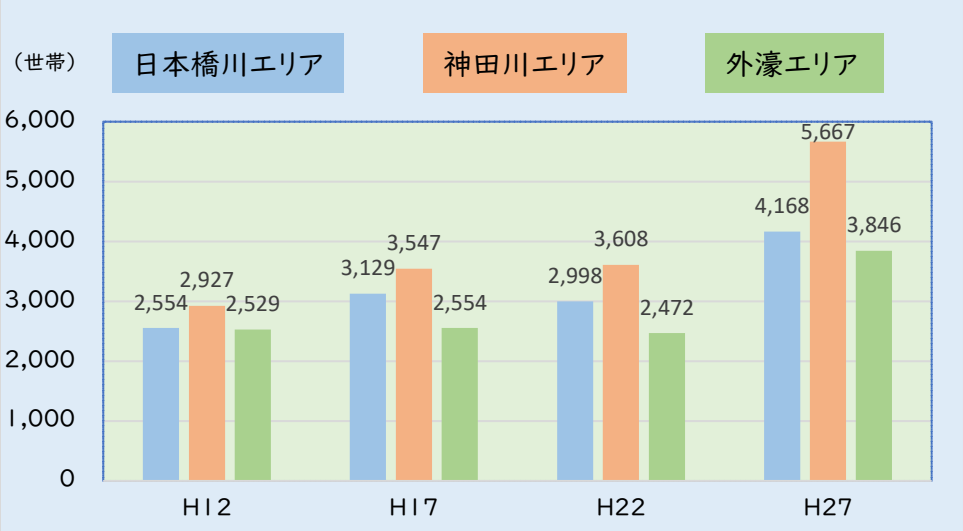


※沿川地域 200m の範囲にある人口メッシュを集計　資料：国勢調査より作成

平成 27 年の人口は日本橋川エリアで 7,131 人、神田川エリアで 9,463 人、外濠エリアで 7,527 人となっています。

全エリアとも人口は増加傾向にありますが、中でも神田川エリアは平成 12 年と比較し、約 2 倍にまで増加しています。

2.対象エリアの世帯数推移



※沿川地域 200m の範囲にある人口メッシュを集計　資料：国勢調査より作成

世帯数については、全エリアとも平成 22 年から平成 27 年の間で大きく増加しています。また、日本橋川エリアでは他エリアと比較し、世帯数の増加率が 1.6 倍程度、人口の増加率が 1.4 倍程度となっており、少人数世帯が増加していると推測されます。

資料１

3.区民の川に対する意識

令和３年度に千代田区が行った区民意識調査で、区民が川に対してどのようなイメージを持っているかのアンケート調査の結果です。

３つの項目について、次のような回答が得られました。

・区内の水辺環境の満足度

・満足していない理由

・水辺でしたい活動

区内の水辺環境の満足度

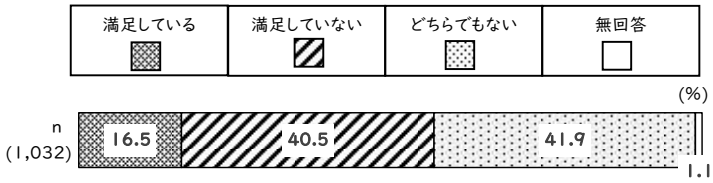


図　区内の水辺環境の満足度

区内の水辺環境の満足度では、「満足していない」が41%と高い割合を示し、「どちらでもない」の回答を除外すると満足している人の割合は20%を切っています。

（水辺環境に）満足していない理由

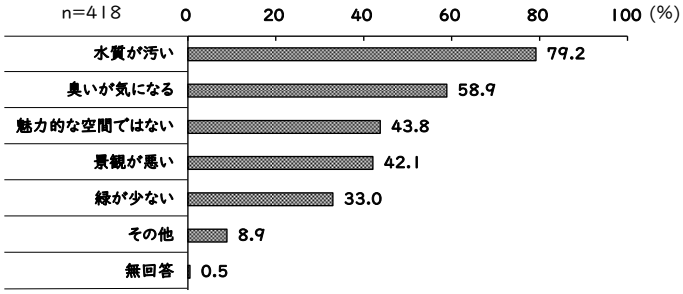


図　満足していない理由

満足していない理由では「水質が汚い」が79%と最も高く、次いで「臭いが気になる」、「魅力的な空間でない」、「景観が悪い」の順番となっています。

水辺でしたい活動

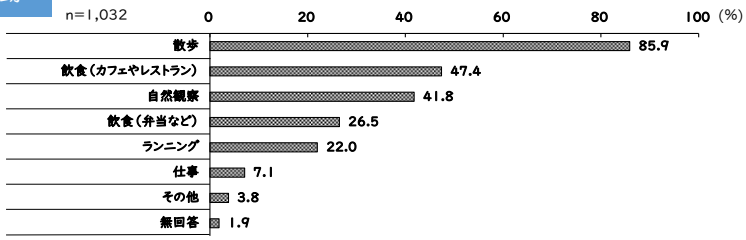


図　水辺でしたい活動

水辺でしたい活動では、「散歩」が85%と最も高く、次いで「飲食（カフェやレストラン）」が47.4%と多くなっています。

4.土地利用

土地利用については、エリアごとに全体の分析を行うとともに、地域ごとの特性を把握するため、都市計画マスタープランにおける７つの地域区分を基に分析を行いました。

日本橋川エリア

全体

業務・商業用地が約７割を占め、次いで公共用地が２割弱となっており、住居系地域の割合は小さくなっています。

①神保町・飯田橋地域（神田三崎町～一ツ橋一丁目・飯田橋三丁目～一ツ橋二丁目）

合同庁舎など大型の公共施設が立地しており、公共用地の割合が日本橋川エリアでは最も大きくなっています。

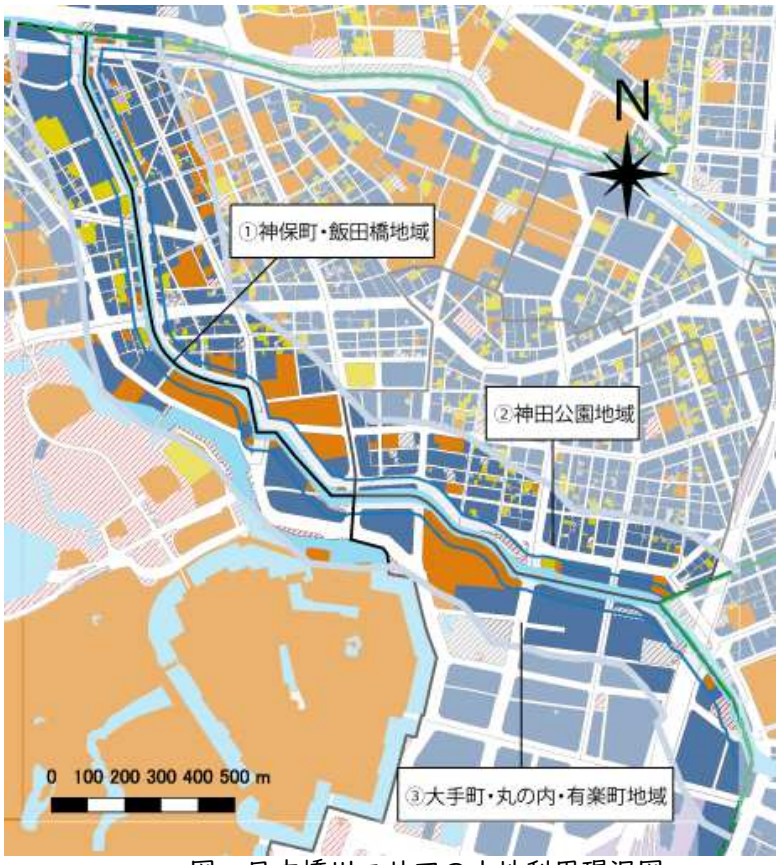


図　日本橋川エリアの土地利用現況図

②神田公園地域（神田錦町三丁目～内神田二丁目）

沿川には業務施設が立ち並び、地域の大半を業務・商業用地が占めています。

③大手町・丸の内・有楽町地域（大手町一丁目～大手町二丁目）

大規模なオフィスビル・公共施設が立ち並んでおり、日本橋川沿川では再開発計画が一体的に進められています。

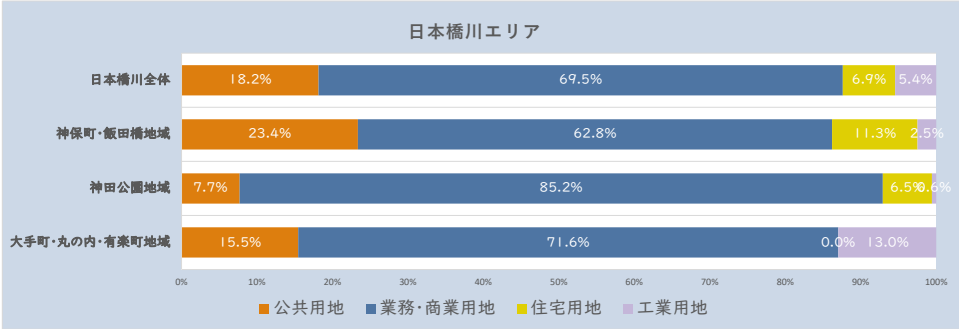


図　日本橋川エリアの土地利用割合

※沿川 200m の範囲を集計　資料：平成 28 年度土地利用現況調査

資料１

神田川エリア

全体

全体を通して業務・商業用地が多くを占め、地域ごとに土地利用の特徴の差が大きくなっています。

①和泉橋地域（神田佐久間町一丁目～東神田三丁目・神田須田町二丁目～東神田二丁目）

和泉橋地域には、小・中規模の業務系施設が多くまた秋葉原駅に近い場所では商業系の建物が多く占めています。一方で、下流側に行くに従い中規模の住宅の割合が増えています。

一方で、公共用地が占める割合は全地域で最も少なくなっています。

②万世橋地域（外神田二丁目～外神田一丁目・神田駿河台四丁目～神田須田町一丁目）

秋葉原駅を中心に大規模な商業・業務施設する一方、神田川に近い地点では小規模な商業施設が多くなっています。

③神保町・飯田橋地域（飯田橋四丁目～神田駿河台二丁目）

駿河台周辺に大きな病院などがあり、公共用地に占める割合は神田川エリアの中で最も大きくなっています。

図　神田川エリアの土地利用現況図

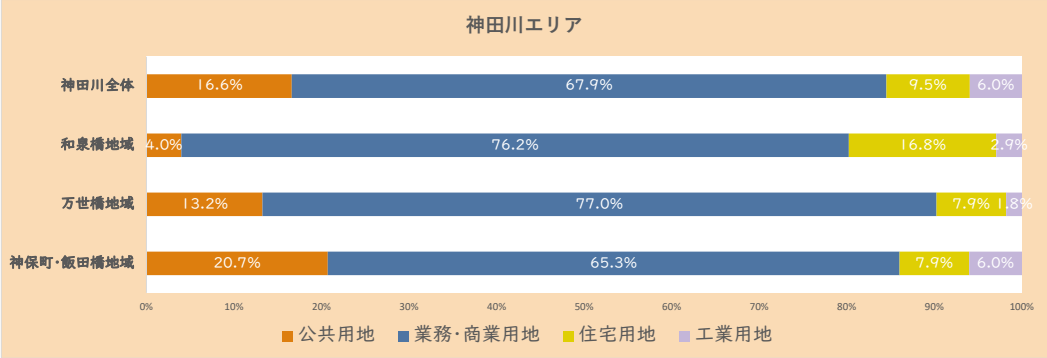


図　神田川エリアの土地利用割合

※沿川 200m の範囲を集計　資料：平成 28 年度土地利用現況調査

資料１

外濠エリア

全体

大学のキャンパス・公園等公共用地の占める割合が大きく、千代田区全体の割合より大きくなっています。また、住宅用地の割合も３エリアの中では最も大きくなっています。

①麹町・番町地域（紀尾井町～五番町）

沿川の公共用地としては公園の用地が大きな割合を占めています。また、小規模な住宅が点在しており相対的に業務・商業用地の割合は小さくなっています。

②飯田橋・富士見地域（九段北四丁目～飯田橋四丁目）

大規模な大学・病院が存在し、公共用地の占める割合が大きい一方、再開発による高層住宅が数か所完成しており、住宅用地の割合も大きくなっています。

図　外濠エリアの土地利用現況図

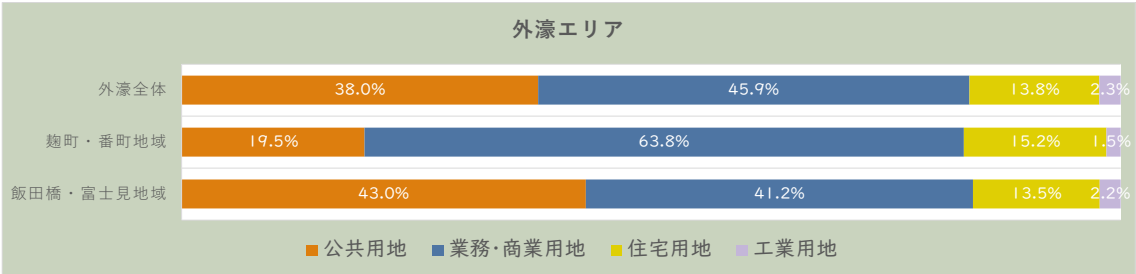


図　外濠エリアの土地利用割合

※沿川 200m の範囲を集計　資料：平成 28 年度土地利用現況調査

資料１

各エリアの比較考察

各エリアの土地利用の現況を分析した結果、以下のような結果がわかりました。

日本橋川エリアでは、全体にわたって業務・商業用地の割合が大きくなっているほか、川沿いには大規模な公共用地がいくつか広がっており、連続して公共用地がつながっているような箇所も見られます。

神田川エリアでは、同じく業務・商業用地の割合が多くなっていますが地域ごとに住宅用地・公共用地の割合が異なっています。特に下流（和泉橋地域）は住宅用地の割合が多く公共用地の割合が少なくなっており、上流（神保町地域）は住宅用地の割合が少なく、公共用地の割合が多くなっています。

外濠エリアでは、他エリアに比べ業務・商業用地の割合が少なく、公共・住宅用地の割合が多くなっています。中でも飯田橋・富士見地域は大規模な教育施設や病院が点在し、公共用地の割合が多くなっています。

以上のことから、千代田区の川沿いには基本的に業務・商業用地が集合しており、建築物が立て込んでいます。その中にある公共用地は比較的土地の面積が大きく、余裕のある土地の利用となっています。

5.地域資源

地域資源として、人々が立ち寄れる施設や特徴的な歴史資源、神社仏閣、滞留空間としての公園の抽出を行いました。

橋りょう

区内の川にかかる橋りょうは、関東大震災後に架橋された震災復興橋りょうと呼ばれる橋りょうが大半を占めています。

これらの橋りょうは当時の先進技術を用い、美観と機能を兼ね備えた橋りょうとして、千代田区景観まちづくり重要物件に指定されています。

常盤橋（震災復興橋りょう）

公園

区内には多くの公園が点在していますが、国民公園である皇居外苑、千鳥ヶ淵戦没者墓苑、都立公園である日比谷公園を除き、児童遊園や区立公園となっています。

区立公園や児童遊園の多くは、橋詰空間や街中にある空地を利用した小規模な公園となっています。

大規模店舗

区内には大規模店舗が 53 か所存在し、東京駅周辺、秋葉原周辺、神保町周辺にその多くが集積しています。川沿いのエリア内に存在するのは秋葉原周辺にある大規模店舗が多くを占めており、家電量販店が中心となっています。

神社・寺院

神社・寺院は区内に 15 か所存在し、東京大神宮や靖国神社、神田明神といった神社が点在しています。また、川沿いにも 5 か所の神社・寺院が存在しています。

対岸からみた柳森神社

文化財

千代田区内には江戸時代から明治時代にかけての文化財が多く、現在では国指定文化財が 13 件、国登録有形文化財が 10 件、東京都指定文化財が 17 件存在しています。

資料１

日本橋川エリアの資源

日本橋川エリアでは、いくつかの小規模な公園が点在しています。

また、近年再開発が行われた飯田橋アイガーデンスクエアや大手町地区の現在進行中の再開発地区では沿川の歩道整備が進んでいます。

以下に日本橋川エリアに存在する資源の一覧を示します。

橋りょう	公園	大規模店舗	神社・寺院	文化財
・三崎橋　・雉子橋 ・小石川橋梁・一ツ橋 ・新三崎橋・錦橋 ・あいあい橋・神田橋 ・新川橋・鎌倉橋 ・堀留橋・外濠橋梁 ・南堀留橋・新常盤橋 ・俎橋・常磐橋 ・宝田橋・常盤橋 ※（赤字は震災復興橋りょう）	・堀留北児童遊園 ・堀留南児童遊園 ・神三児童遊園 ・俎橋児童遊園 ・錦三会児童遊園 ・神田橋公園 ・内神田尾嶋公園 ・常盤橋公園	－	・大光院 ・御宿稲荷神社	・滝沢馬琴宅跡の井戸 ・蕃書調所跡 ・旧九段会館 ・常盤橋門跡

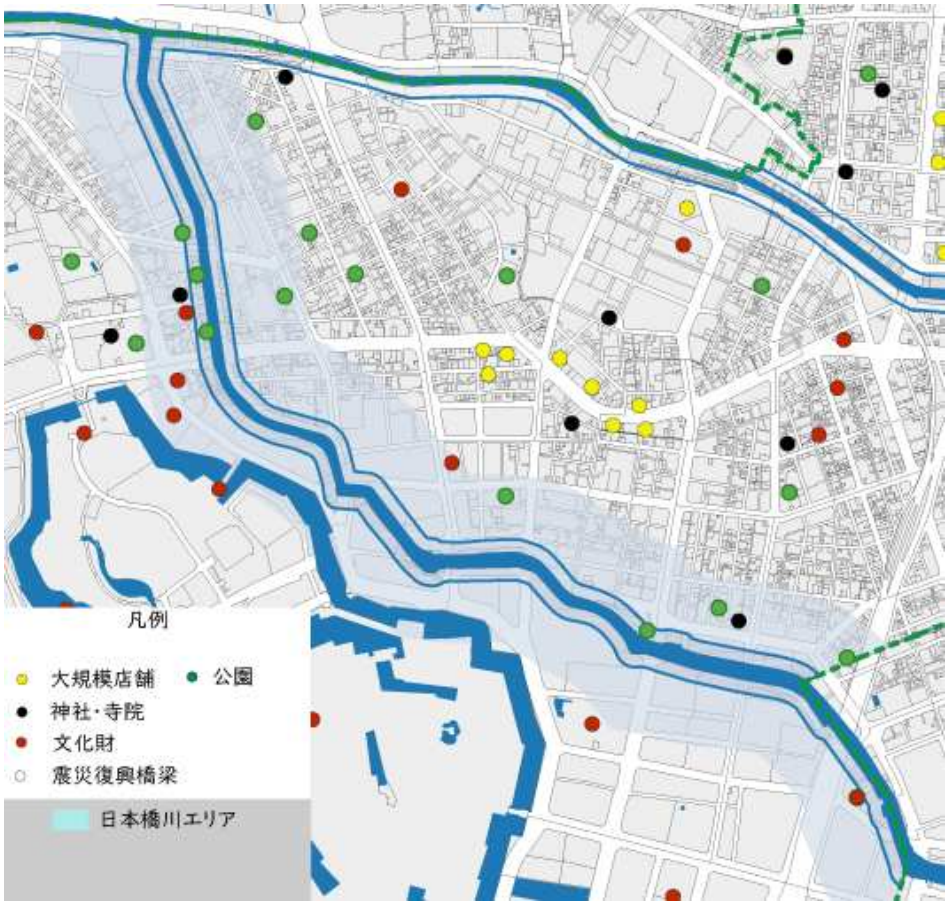


図　日本橋川エリアの地域資源

資料１

神田川エリアの資源

神田川エリアでは、万世橋地域周辺を中心として大規模な商業施設が集積しており、周囲のオフィスビルも含めて、商業的な利用が盛んになっています。その中にいくつか規模は小さいものの橋詰空間を利用した公園が点在しています。

川沿いには柳森神社や三崎稲荷神社といった川に面した神社が存在しています。

橋りょう	公園	大規模店舗	神社・寺院	文化財
・隆慶橋 ・船河原橋 ・小石川橋 ・後楽橋 ・水道橋 ・お茶の水橋 ・聖橋 ・総武線神田川橋梁 ・昌平橋 ・万世橋 ・神田川橋梁 ・神田ふれあい橋 ・和泉橋 ・美倉橋 ・左衛門橋 ※（赤字は震災復興橋りょう）	・淡路公園 ・秋葉原公園 ・佐久間橋公園 ・和泉橋南西児童遊園 ・和泉橋南東児童遊園 ・佐久間公園 ・美倉橋西児童遊園 ・美倉橋北児童遊園 ・美倉橋東児童遊園 ・左衛門橋南児童遊園 ・左衛門橋北児童遊園	・新御茶ノ水ビルディング・サンクレール ・ラオックス本店 ・ソフマップ東京・秋葉原アミューズメント館 ・秋葉原ラジオ会館 ・BOOKOFF 秋葉原駅前店 ・AKIBA TOLIM ・アトレ秋葉原 ・書泉ブックタワー	・三崎稲荷神社 ・柳森神社	・神田教会聖堂 ・ニコライ堂 ・山本歯科医院

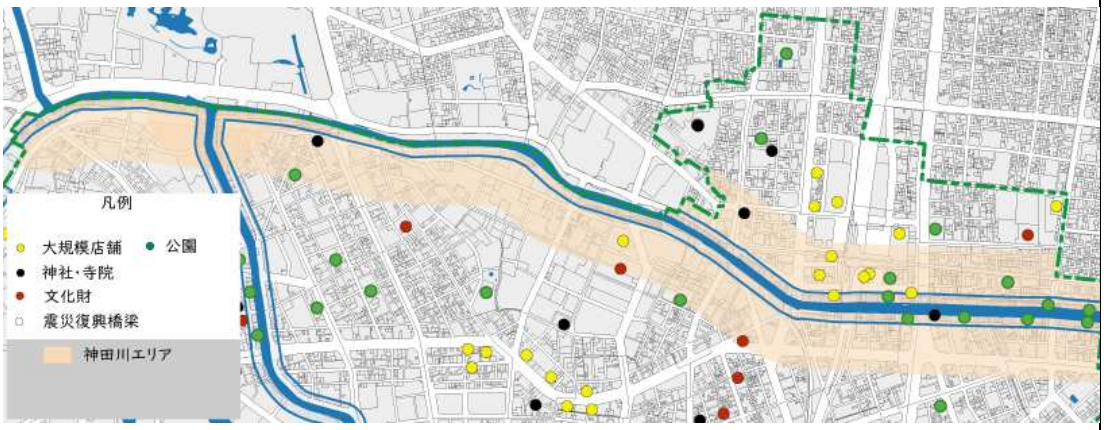


図　神田川エリアの地域資源

資料１

外濠エリアの資源

外濠エリアでは外濠・鉄道および線状に広がる外濠公園と一体となったみどりの多い風景が千代田区側で広がっており、外濠の水面にはカフェ・釣り堀等水辺空間を活かした施設も存在します。

外濠公園の水面

橋りょう	公園	大規模店舗	神社・寺院	文化財
・飯田橋 ・牛込橋 ・新見附橋 ・市ヶ谷橋 ・新四ツ谷見附橋 ・四ツ谷見附橋 ・弁慶橋	・五番町児童遊園 ・外濠公園 ・飯田橋児童遊園	・飯田橋サクラテラス	・心法寺	・江戸城外堀跡 ・旧李王家東京邸

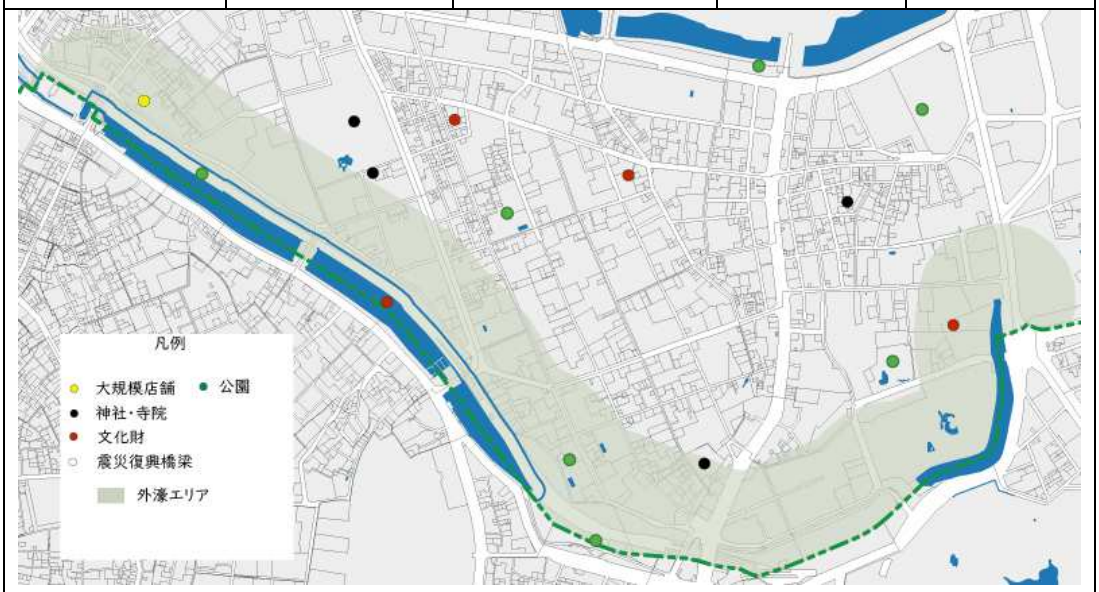


図　外濠エリアの地域資源

6.各エリアの景観特性

日本橋川エリア

日本橋川エリアでは、全域を通して日本橋川の護岸整備により、川までの高低差があり水面がある印象が薄くなってしまっています。

上空には首都高速が全区間にわたって通っており、頭上の閉塞感が強い印象を与えています。

首都高により閉塞感がある日本橋川

また、沿川の多くの箇所で建物が立ち並び、川を通じた良好な見通しは確保されていませんが、再開発により川沿いに樹木の植えられた幅広な歩道空間が確保されるなど、水辺に顔を向けたまちづくりの取り組みが始まっています。

神田川エリア

和泉橋地域では下流になるにつれ川幅が広くなり、川の上空には空の広がりを感じられますが、階数の高いビルが川近傍に林立しており、橋の上からではないと川の存在は確認できません。

万世橋地域では、昌平橋・万世橋とアーチ形の戦災復興橋りょうが続き、その沿川には旧万世橋駅の赤レンガがあり、その上空を台地からそのまま鉄道が高架で川の上を通過するという近代的な土木建築物が織りなす複合的な景観となっています。

昌平橋付近の神田川と鉄道が織りなす複合的な景観

お茶の水付近は江戸時代に台地を開削して作られた区間であり、その部分だけ周辺の土地に比べ水面の位置が低くなっており、川も若干蛇行しています。

そのため、都心には珍しい渓谷のような景観となっており、その上をかかるアーチが特徴的な聖橋とともに象徴的な風景となっています。

聖橋方面

神保町・飯田橋地域では、護岸に沿ってビルが立ち並び、護岸整備により川の上空にのみ空間が抜けたような印象を与えている一方、周辺地域からはビルにより川への眺めが遮断されているため、川がある印象は薄くなっています。

外濠エリア

飯田橋・富士見地域では、沿川に階数の高いビルが並び、上空に首都高速が通っており、川の上空にも閉塞感が生まれています。飯田橋駅付近で川面がみられますが、大きな交差点と一体となり、川の印象は薄くなっています。

外濠エリア全域では、外濠沿いに線状に続く公園から線路を挟む形ですが、外濠を見下ろし、公園には多くの樹木が並び、都心では貴重な緑と水を感じられる空間になっています。

資料１

7.眺望点とランドマーク

各エリアにおける眺望が望める箇所、および地域のランドマークとして目立つ建築物の抽出を行いました。

日本橋川エリアにおいては、首都高速が川の上空を覆っている関係から常盤橋公園付近の一部でしか川をいかした眺望が望める箇所はありません。

常盤橋公園から見た常盤橋

図　日本橋川エリア眺望点とランドマークとなる建物

神田川・外濠エリアでは川にかかる橋のほとんどから眺望が両方向望めるほかにも、神田川エリアでは水道橋から御茶ノ水にかけて、台地を登っていく路上から連続して川を見渡し、対岸の緑が望めます。

また、聖橋からはニコライ堂や神田川と川面をまたぐ地下鉄丸ノ内線、高く川をまたぐ JR 線がみられるビューポイントとなっています。

聖橋から見た秋葉原方向

図　神田川エリア眺望点とランドマークとなる建物

外濠エリアでは外濠公園を通して連続した眺望が望めるほか、四ツ谷付近では橋の上から聖イグナチオ教会が望めるなど、特徴的な眺望があります。

聖イグナチオ教会

図　外濠エリア眺望点とランドマークとなる建物

資料１

8.水辺に近づける場所

日本橋川エリアでは、護岸整備により水面と歩道との間に高低差があり加えて沿川にも建物が多く立ち並んでおり、水辺の近くまでアクセスできる地点は限られています。

一方で近年再開発が行われた飯田橋アイガーデンスクエアや大手町川端緑道では川に面した歩道の整備が行われ、幅員の広い歩行空間の確保がなされ、川に面したベンチなどの休憩施設が配置されるなど、水辺に近づける空間の整備が行われています。

川端緑道に
設置されたベンチ

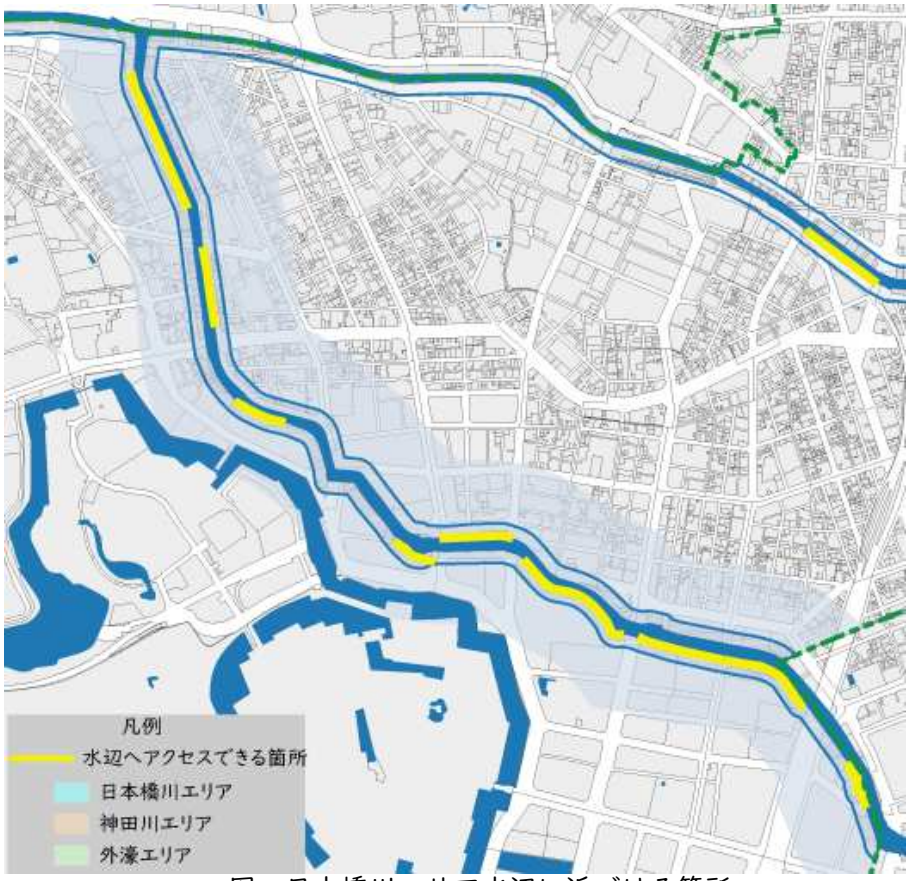


図　日本橋川エリア水辺に近づける箇所

神田川エリアでは、神保町～万世橋地域にかけて右岸を鉄道が川と市街地の間を通っており、また川が谷底を通っているため、川に近づける地点は少なくなっています。

一方で、万世橋地域には川沿いのテラスを設けた mAAch ecute があり、水辺に近接した商業施設となっています。

和泉橋地域では、和泉橋防災船着場に隣接した広場から、階段状になった敷地形状により水面近くまでアクセスすることができるほか、ホテルの中の飲食店にテラスが設置されています。また、橋詰に設けられた小規模な公園において水辺の近くに行くことができます。

和泉橋船着場の広場

図　神田川エリア水辺に近づける箇所

外濠エリアでは、川沿いに線状に連なる公園から、鉄道を挟んでにはなりますが、外濠を見下ろすことが可能です。

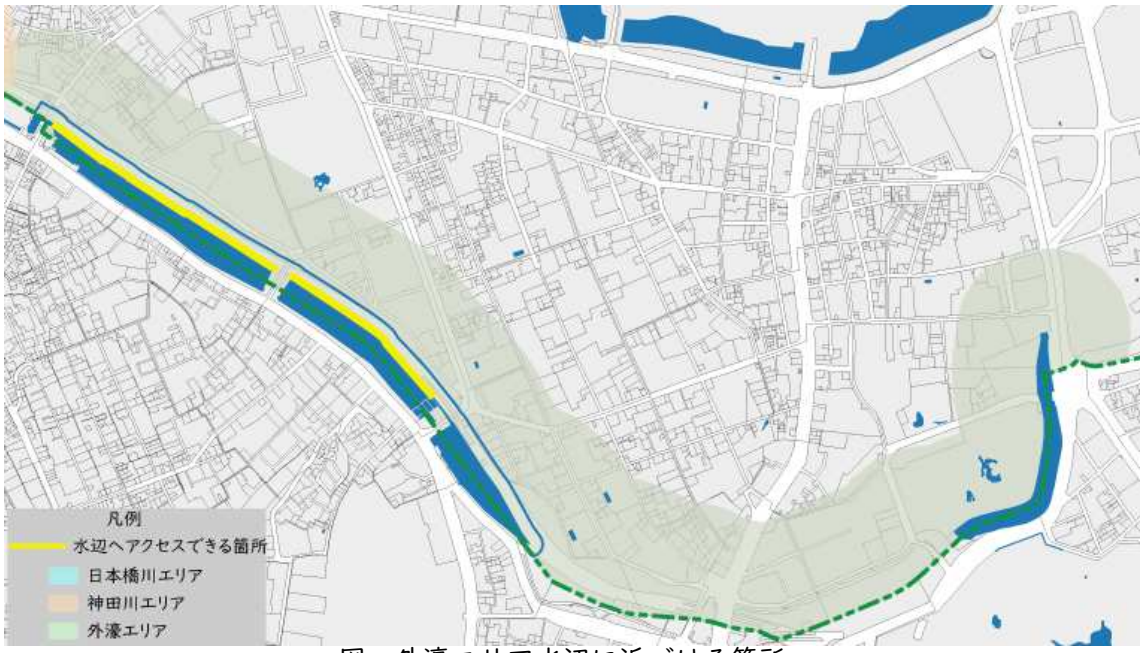


図　外濠エリア水辺に近づける箇所

資料１

区内のエリア別の現状を整理すると以下の表のとおりとなります。

エリア	人口変化	世帯数変化	土地利用	地域資源					眺望点	水辺にアクセスできる箇所
				橋りょう	公園	大規模店舗	神社・寺院	文化財		
日本橋川エリア	平成 12 年：4,899 人 平成 17 年：5,399 人 平成 22 年：5,916 人 平成 27 年：7,131 人 （増加率：約 146%）	平成 12 年：2,554 世帯 平成 17 年：3,129 世帯 平成 22 年：2,998 世帯 平成 27 年：4,168 世帯 （増加率：約 163%）	公共用地 18.2% 業務・商業用地 69.5% 住宅用地 6.9%	18 橋 （うち震災復興橋りょう 11 橋）	8 か所	0 店	2 か所	4 件	2 か所	7 地点
神田川エリア	平成 12 年：5,100 人 平成 17 年：6,008 人 平成 22 年：6,951 人 平成 27 年：9,463 人 （増加率：約 186%）	平成 12 年：2,927 世帯 平成 17 年：3,547 世帯 平成 22 年：3,608 世帯 平成 27 年：5,667 世帯 （増加率：約 193%）	公共用地 16.6% 業務・商業用地 67.9% 住宅用地 9.5%	15 橋 （うち震災復興橋りょう 8 橋）	11 か所	8 店	2 か所	3 件	13 か所 （連続的な眺望点 2 か所）	2 地点
外濠エリア	平成 12 年：4,927 人 平成 17 年：4,899 人 平成 22 年：5,626 人 平成 27 年：7,527 人 （増加率：約 153%）	平成 12 年：2,529 世帯 平成 17 年：2,554 世帯 平成 22 年：2,472 世帯 平成 27 年：3,846 世帯 （増加率：約 152%）	公共用地 38.0% 業務・商業用地 45.9% 住宅用地 13.8%	7 橋	3 か所	1 店	1 か所	2 件	14 か所	2 地点

※人口変化・世帯数変化における増加率は平成 12 年～平成 27 年で比較

日本橋川エリアでは、人口の増加が 3 エリアの中だと最も緩やかであり住宅用地が土地利用に占める割合も小さくなっています。地域資源としては震災復興橋りょうが多く日本橋川にかかっており、また水辺にアクセスできる箇所も多くなっています。

神田川エリアでは人口・世帯数の増加が３エリアの中で最も大きくなっています。また、公園・眺望点が多く存在し、川を近くで感じられる箇所が点在していることがわかります。

外濠エリアは住宅用地の割合が多く、人口増加率に比べて世帯の増加率は緩やかになっています。また、神田川エリアと同じく眺望点が多く存在し、川を見ることのできる箇所の活用が望まれます。

資料１

9.川沿いの現状を踏まえた課題

共通の課題

水辺にアクセスできる地点を含めた回遊性の向上

現在、現状の水辺にアクセスできる空間は沿川に存在していますが、それぞれが独立しており、回遊性に乏しいため、周辺施設の空地も含めた全体の回遊性を図る必要があります。

河川水質の向上

千代田区内の河川は現在水質が良いとはいえる状況になく、汚水の流入や流れの滞留などが発生しています。導入水量の増加や流入する雨水の分流などにより河川水質を向上させ、環境の改善を図る必要があります。

川に背を向けた建築物

建築基準法、その河川管理上の規制により、川沿いの建築物は川に対して背を向けて建てられてしまう課題があります。mAAch ecute のように川沿いに人が憩える場所を設け、川に顔を向けられる建築物が増え、つなげていくことが重要です。

資料１

日本橋川エリア

業務集積地における空地の拡充

神田公園地域、大手町・丸の内・有楽町地域では業務・商業用地が大半を占め、公園などオープンスペースは非常に少ない状況になっており、人々が滞留できる箇所が求められます。

そのため、日本橋川の橋詰空間・水辺の歩行空間の活用が考えられます。

一体感のない川とまちの関係の改善

現在、川とまちの間は多くの地点で沿川にビルが立ち並び、川とまちとの一体感が感じづらくなっており、旧来の川を境界としたまちの特性の違いとともに、街並みの一体感が低下しています。

そのため、川を使ってまちとまちをつなぐための川に開いたまちづくり形成を図る必要があります。

河川空間の上空の閉塞感

首都高速が河川上部空間を覆い、川に背を向けて建築物が立ち並んでいるために、閉鎖的な空間となっており、日常的に人々が河川の存在を感じるのは橋の上からや点在する河川に面した空間が中心となってしまっています。

このため、生活の中で人々は河川が身近なものとなっておらず、活用する機会が少なくなってしまっています。

資料１

神田川エリア

貴重な都心にある渓谷様景観の保全

お茶の水近辺の神田川は、江戸時代からの土木構築物であり都心では貴重な渓谷のような景観となっています。

千代田区側においては鉄道施設が川に面しており、擁壁のような構造になっているため、緑化などを図り景観の保全を図る必要があります。

地域間の移動の円滑化

神田川が通るエリアは、幹線道路・神田川により歩行者の移動経路が限られた動線となっています。

川沿いの歩道の整備や新たな歩道空間の拡充などを行い快適な歩行空間を形成することで歩行者の地域間移動の円滑化が図られると考えられます。

大規模集客施設との連携

秋葉原周辺では、沿川も含め大規模集客施設が多く存在します。

拠点となる秋葉原駅から集客施設を通じて、エリア全体のさらなる活性化を図り、地域振興につなげていく必要があります。

外濠エリア

歴史ある自然をいかした景観の形成

外濠沿いの公園の樹木をいかし、現状の雑然とした空間を江戸時代からの土手としての歴史性をいかした樹木による都心の貴重な憩いの空間の質の向上を図る必要があります。

大学などの大規模施設との連携

川沿いには公園・広場が多く存在しますが、住む人や訪れる人にとって更に魅力のある場所にする必要があります。

外濠を挟んで隣接する区との連携

外濠エリアは千代田区の新宿区と港区との区界に位置しています。区を超えて外濠周辺の道路等の意匠や、サイン類の統一等を行い、外濠周辺を移動する歩行者が歩きやすく、心地よい空間を作っていく必要があります。

資料１

10.川沿いの空間が持つ機能・ポテンシャル

川沿いの空間が持つ機能を、歴史的な背景、現状の分析から抽出すると以下のような分類となります。

防災

・治水機能の維持
・舟運を利用した災害時輸送
・空地としての運用

観光

・歴史的資源
（震災復興橋りょうなど）
・眺望点からの眺め
・防災船着場を活用した舟運観光のさらなる充実
・江戸時代の資源の活用
・オープンスペースとしてのイベント利用
・橋と周辺建物の組み合わせによる景観形成

にぎわい

・商業施設の集積
・交通の拠点としての橋の機能
・新たな歩行者用通路としての河川空間の利用
・オープンスペースとしての利用
・イベントやアクティビティとしての川の利用

環境

・風を感じる場所としての利用
（移動経路・滞在）
・橋詰空間を利用した公園
・水質改善による生物多様性
・堤防上空間などの緑の豊かさ
・休息を与える空間としての水辺

資料１

　千代田区の川沿いの空間の課題と川沿いの空間が持つポテンシャルを合わせて考慮すると、目指す方向性は以下のようになります。

休息できる空間が不足しているため、川の風を感じる場所としてのポテンシャルをいかした休息空間の充実

水質を改善し、川そのものの環境価値の向上

点在する歴史的資源・歩行空間に連続性を持たせる

資料１

第３章　川沿いまちづくり実現のためのビジョン・方針

全体ビジョン

「歴史をつなぐ水をいかしたにぎわいと憩いの場の創出」

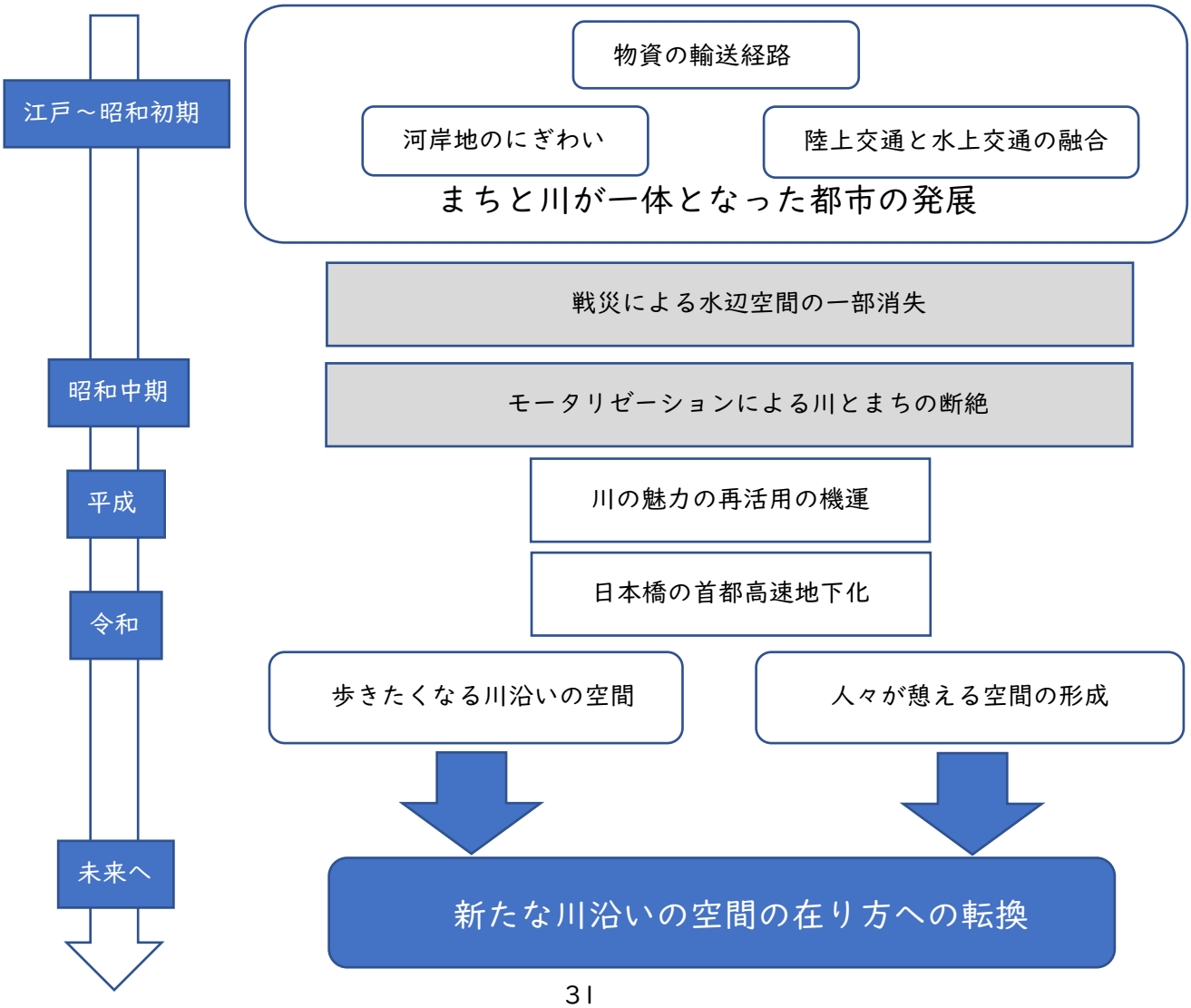
区内の河川は江戸時代から生活に欠かせない輸送経路であり、水運を中心とした街の発展に寄与してきた空間です。

しかし開発の中で、川の存在はまちと離れたものになってしまっています。

人々の生活の中で欠かせない存在であった川は、長い歴史の中で川沿いの空間は変化を続けてきました。

近年では川の魅力を見つめなおし、川沿いの空間の持つポテンシャルを生かし、再活用する機運が高まってきています。

そこで河川空間を船の輸送経路から人の移動できる経路へと転換し、水と風を感じながらまちとまちをつなぐ空間の創出を目指すことが望まれます。



資料１

川沿いのまちづくりの方針

川に人々の意識を向ける－川の魅力の再発信―

河川空間の様々な利用方法を提示し、加えて河川の水質的環境を向上させることにより、人々に河川が生活の中で安らげる、魅力的な場所だという意識を生み出していきます。

川に開く－水をいかした空間の創出―

区内の河川には商業・業務共に機能が集積している箇所がいくつか存在しています。河川とその周辺の水辺空間が人々にとって魅力的な空間である身近な空間であるという認識をいかし、多くの人々が商業空間では水辺を楽しみ、業務空間では水辺で憩えるような空間を作り上げていきます。

そこで、水辺をいかした商業施設の充実、橋詰広場の活用拡大、河川沿いの空地の休憩空間の創出などを行い川に開かれた拠点を創出しライトアップや修景化に努めるなど、人々がより川・水を身近に感じることが出来る箇所を増やしていきます。

川をつなげる－水辺の拠点同士を結ぶネットワークの構築―

川沿いの歩行空間の確保や、拠点と一体となった歩道状空地の確保、また橋りょうなどの資源をいかしたビューポイントの充実や舟運の活性化を図り、区内の川を一体とした活用を行います。

また、河川ネットワークを区外にも拡大して目を向けて防災や新たな輸送経路としての活用を行います。

川を使う－ハレの場としての河川空間の活用―

古くは、区内の河川は生活を支える輸送路として活用され、人々が行きかう中で盛んな交流が行われていました。

現在において、河川のネットワークや拠点を活用し河川を人々が憩い、楽しむスペースとして再構築をしていくために、人々が気軽に河川空間を利用できる機会を増やしていく必要があります。

そこで、地域主体のお祭り、フリーマーケット等イベントの充実や、行政、地域、事業者が一体となった河川空間の利用のルール作りに取り組む必要があります。